

「アイドル」

それは

女の子達の永遠の憧れ

だがアイドルの頂点に立てるのは

ただ1組・・・

そんなサバイバルな世界に

今3人の女の子と

1人の^{プロデューサー}変態淑女が

足を踏み入れる！

プロローグ

19/7/2005

AM 9:00

七月の三連休明けの火曜日、今日もちょっと外を出ただけで額に汗が滲む。ましてやこれから行こうとしているところは最寄り駅から徒歩十分弱もあるのだから、それだけでもう汗だくになってしまう。普段すっぴんな私にしてはめずらしく一生懸命お化粧をしたのだが、それも無駄な努力になりそうなくらい日差しは今日も強い。

「ここが私の新しい事務所ね……」

第二京浜からちよつと脇道に入った所にその事務所はあった。

「765プロダクション」……ここが私の新しい事務所。もうあんなノジューズでリバースしたり、酔って相方にディーブキスした光景がワールドワイドなインターネットで世界中に配信されたりと醜態を晒し続けた地下アイドルのような芸能生活から脱出するための私の最後の理想郷。

それにしても建物がボロい。雑居ビルの三階のガラス窓にビニールテープで貼付けられた『765』の文字がいかにも急拵えな感じがして本場に名門老舗事務所なのかと疑いたくなる。

「ここ……老舗事務所だよね……」

1955年に創立した老舗事務所とは思えないくらいボロい建物に軽くめまいがして来た。前の事務所も老舗っちゃ老舗だったけどここに比べればまだまだ新参事務所だ。

なのに……なんでこんな雑居ビルの一角に？

軽くめまいを覚えつつむき出しの螺旋階段を上っていく。階段は所々

錆びていてこのビルがいかにも年季が入ったビルであるかを雄弁に物語っている。

セキユリティーなんて糞喰らえと言わんばかりのドアを開けると目の前には机が五個程窓に沿って並べられた簡単な事務所があった。奥の机でウィンドウズミレニアムエディションに事務員とおぼしきおねーさんが四苦八苦している以外は極めて閑散としている。つか今時XPじゃないんだ……。

「あの……すみません」

と話しかけた所で事務員の彼女は目の前のブルースクリーンに発狂している私の声が聴こえるはずも無い。叫び声を聞くにどうも重要な書類が飛んだらしく、きつとこの混乱が落ち着くまで相手にしてもらえないだろう。

待つこと十分少々、ようやくパソコンの調子が安定して目的の作業を終えたのか事務員の彼女はこちらに気付いたみたいだ。

「ああっ、お待たせしてすみません。どのようなご用件でしょうか？」とショートカットのポップのおねーさんは先ほどまでの般若のような形相から一転、営業スマイル全開で言った。あれ？ この顔どこかで見覚えがあるようなないような……。

「あの、今日からこちらにお世話になる予定のアサミンゴスって言うんですけど……社長さん、いらつしやいますか？」

「ああっ、今日からいらしてくださいさるプロデューサーさんですね。はじめまして、私、事務をしております音無小鳥といいます。社長なら奥の応接室にいますのでどうぞ」

はて？ プロデューサー？

一瞬わけが分からなくなる。

私は地下アイドルもどきから卒業して芸能界のスターダムを駆け上がる予定じゃなかったのか？

訳も分からず奥の応接室となつている部屋へと通されるとそこには全身真っ黒ないかにも怪しい雰囲気の長身のおじさんが待つていた。年齢は五十歳ぐらいだろうか？ なにぶん全身が真っ黒なので表情はまったく伺えない。

「はじめまして。アサミンゴスといいます」

「よく来てくれた！ 私が、このプロダクションの社長、『高木』だ。まあ、そこにかけてたまえ」

と落ち着いた声で言われたのでソファに腰を沈める。ソファの座り心地は非常に安っぽい感じがする。

「さて、君にうちの事務所に来てもらつたのは他でもない。単刀直入に言うと君にわが社に所属するアイドル候補生たちを、プロデュースしてもらいたい」

「あの、話がよく見えてこないのですが……私にプロデューサーをやれということでしょうか？」

間違ひなくプロデューサーと呼ばれてる。でもなんで？ だって私は……。

「そういうことだな」

高木社長は静かに応えた。

「ちよつと待つて下さい！ 私は役者として、そして歌手として呼ばれたんじゃないんですか？」

「確かに君はアイドルかもしれないし、舞台役者かもしれないし、歌手かもしれないし、はたまたリアクション芸人かもしれない。だが、私は君のプロデューサーとしての才能に目を付けたのだ」

リアクション芸人は余計な気がする。そういう仕事ばかりだったことは否定しないが。

「どういふことですか？」

「君が出演していたネット番組で君がプロデュースして作ったCDがあつただろう。あれにティンと来てな。君にやら我が765プロダクションを任せられるんじゃないかと思つたんだよ」

確かに以前インターネットで放送していた番組が終了という名の打ち切りになつたときにCDを作つたことがある。番組の最後の思い出にエリちゃん和我が中心となりスタツプさんの協力を得ながら、歌を入れたり、トークを入れたCDを二千枚ほど作つた。もつともお渡し会の参加券やらなんやらをつけたにも関わらず五百枚しか売れず未だにうちにダンボール一箱分の在庫が眠つてゐる。

まさかそれが次の仕事を運んでくるとは思わなかつた。本当、座右の銘である『人生無駄なことなど何一つない』とはよく言つたものだ。

でも気になることが一つある。

「765プロダクションを任せる……ですか」

なんかいきなり重い話になつてきたぞ。

「うむ、現在我が765プロダクションにはプロデューサーがいなくてな」

「はて、これまたなぜに？」

こんな老舗プロダクションだから敏腕プロデューサーの一人や二人ぐらひは軽く抱えているのが普通である。いくら事務所が貧乏だからと言つてもプロデューサーなしではアイドル事務所として活動が成り立たない。

「実は去年の秋まで所属していたプロデューサーが結婚を機に独立して

しまつてな。私としては残つて欲しかったのだが本人たつての希望でね
それで新しいプロデューサーが必要となった訳だよ」

なるほど、そういうことか。てつきりあまりの貧乏さに逃げられたの
かと思つた。

「プロデューサーとしてなら私はもう一度君が輝けると信じている。ど
うだい？ プロデューサーとして芸能界にもう一花咲かせてみる気はな
いかね」

どうかね？ と聞かれてもまだタレントとして賞味期限が切れたとは
思つて無いし思いたくもない。

「少し考えさせてもらつていいですか？」

「ああつ、構わんよ。できればそうだな、今週中にまた返事を聞かせて
欲しい」

「……分かりました」

「我が765プロはいつでも君を待っているよ」

「……ありがとうございます」

プロデューサーとしての仕事はあるけど、タレントとしての仕事はな
い。プロデューサーとしての価値はあるかもしれないけど、タレントと
しての価値はもうない。そう言われているように感じた。それがとても
悔しかった。

もつとタレントとして舞台上上がつて主役を務めて喝采を浴びたり、
大きなホールで大勢の観客の前でライブをやつて歓声を浴びたり、毎日
テレビに出て、時には週刊誌に熱愛騒動が掲載されたりする、そんな華
やかな芸能生活を送りたかつた。そんな華やかな芸能生活を送ることを
夢見てこの業界に入ったはずだつた。

前の事務所に入つてから養成所の同期達が次々と華やかな舞台上で活躍

していくなか、私はずーつとずーつと下積みのような日々を送つてきて、
いつかはきらめく舞台上に立てるであろうと信じてここまで耐えて頑張つ
てきたのにあんまりにもあんまりにもな話である。

悔しきで泣きそうになるところをなんとか耐えてソファから立ち上
がる。そして、私は力なく765プロダクションの事務所をあとにした
のであつた。

PM9:00

「いいじゃん、いいじゃん。アイドルのプロデューサー、やつてみれば
いいじゃん」

私の中のどんよりとした重たい気持ちとは裏腹に電話越しのエリちゃ
んはコロコロと笑いながら軽く言つてのけてくる。時折、バリバリとポ
テトチップか何かを咀嚼する音やジュースをズルズルとストローで吸い
上げるような音が聞こえ、私の重たい話を自宅のベッドでゴロゴロしな
がらお気楽に聞いているんだらうなつてことがなんとなく伝わってくる。

「エリちゃん、私は真剣に、真剣に悩んでるんだよ」

「だつてさー、プロデューサーとはいえ仕事があるだけマジじゃん。あ
たしなんてこの間おかーさんに『ようやく本屋の店員としてちゃんと就
職する気になつたのね』なんて言われたんだよー」

「そりゃ、まあ、そうだけどさあ……」

ふんすかとか可愛らしく怒るエリちゃんに私は力なく返事をする。

そう、よくよく落ちついて考えてみればこの業界は仕事があるだけマ
シ。しかも、仕事があつたとしても単発だつたり、だいたい数ヶ月間か
ら半年程度の期間限定のお仕事だつたりするので、次の仕事の依頼がな
ければ即無職な世界である。だからプロデューサーとして完全に裏方に

回るとはいえ、きちんとした仕事があるというのはそれはそれでいい状態であることは確かだ。

「だいたい、アサミちゃん、『若くて』可愛い女の子といちゃこらすの好きだからちょうどいいんじゃないの？ 女の子に可愛い服着せてさあ、『君をスターにしてあげるよ』とか言つて自宅に連れ込んであんなことやこんなことできるからちょうどいいんじゃない？」

さすがにそれはアイドルのプロデューサーという職業に偏見を持ちすぎではないだろうか？ エッチなゲームや小説の中の世界の話……だと思ふ。

「だいたい何でやたら『若くて』を強調してくるのが意味わかんない。最近、事務所を退所してからのごたごたでエリちゃんのことをほつたらかしにしていたことへの当てつけだろうか？」

「エリちゃん、それ、本の読みすぎじゃないの？ だいたい、一体いつ私が女の子を自宅に連れ込んでいちゃこらしてたつていうのさ」

そういう願望が全くないわけではないが、実際に女の子を家に連れ込んで体を重ねたりなんてことはしたことがない。

「……ユミちゃん」

「は？」

『ユミちゃん』つてのは私たちの共通の後輩で三月まで同じ事務所だった娘のことだ。大阪から出てきてまだ間もなく、こつちでのお友達もまだ少ないことから色々エリちゃんや私で面倒を見ていたりしたのだ。「ユミちゃん、お家に連れ込んだんでしょ？ あたし、まだアサミちゃんの新いお家にお呼ばれたことないのに」

「ちよつと待つて。なんか、その言い方語弊がある」

つい数週間前に街でばつたりとユミと会つて、その後お昼を一緒に食

べて、話足りなくて喫茶店で夕方まで喋つていて、それでも物足りなくて結局家で一緒に夕ご飯を食べて、そのまま朝までつてことはあるにはあつたけど、私がユミを新居に連れ込んでエリちゃんが思つているようなことは断じてなかつたと記憶しております。はい。

「だつて、ユミちゃん言つてたよ、『はやー、この間アサミさんのお家にご飯食べに行つたら、ユミ、アサミさんに食べられてもうた』つて。また、酔つ払つてなんかしたんじゃないの？」

「だいぶお怒りのエリちゃん。」

確かになぜか実家からお酒が送られてきて、それがとつてもいい地元のお酒だから夕食の時にユミと一緒にちよつと飲んで、その後の記憶が……よくよく考えてみれば全くないぞ。

「……タブンナニモシテナイヨ。エリちゃん、ワタシヲシンジテ」

あれ？ おかしいなあ。私潔白なはずなのにうまく言葉が話せないぞ。「で、アサミちゃんが浮気したつて自白したことでこの件は置いて、どうするの？ 受けるの？」

エリちゃんのなかで私が浮気したことは確定らしい。いや、そもそもその前にお前は一体いつから私の本妻になつたんだ？

「うーん、もうちよつと考えてみようかと思ふ。まだまだタレントで続けたいつて未練もあるし……」

結局はそこなのだ。正直、恵まれたタレント活動じゃなかつたとはいえ、まだ完全に未練を断ち切れたわけじゃない。許されるのであればこれからもタレントとして活動を続けていきたいのだ。

「でもね、アサミちゃん。チャンスの神様は絶対にアサミちゃんを待つてはくれないんだよ」

「……わかつてる」

「本当かなあ？ アサミちゃん、優柔不断だから」

エリちゃんがいたずらっぽく笑う。

「そんなことないもん」

「なにをおっしゃられるやら」

「ミンゴス、優柔不断じゃないもん」

「じゃあ、アサミちゃん、私とユミちゃん、どっちを取るの？」

「は？」

時折エリちゃんは妙なことを言い出すけど今回はあまりにも唐突すぎて一瞬頭がフリーズする。

そりゃ、エリちゃんはまだ付き合いたいぶ長いし、ファンの間では『エリンゴス』とか言われるくらい仲もいいけど、ユミだってやっぱり可愛い後輩で妹みたいな存在であることには変わりないわけで、この二人からどっちかを選べって言われても……うーん、うーん、うーん。

「はい、アサミちゃん、時間切れ」

私の持ち時間は三秒もなかったぞ。

「なにそれ」

「アサミちゃんがいかに優柔不断だって話。まあ、アサミちゃんは口に出さないだけで心の中ではユミちゃんなんだろうけど」

これは新居に今まで呼んだことがないことを相当根に持っているみたいだ。

エリちゃんは大変お怒りである。

「そんなことないよー。ただ、エリちゃんは親友で、ユミは可愛い後輩で……どっちがってそういう問題じゃ……」

「そうやって迷っているうちにチャンスの神様は本当にどこかに行っちゃうんだから」

「そしてあたしもね」とエリちゃんは付け加えた。意図的に可愛らしい声を作っておっしゃられるあたり本当にエリコさまはお怒りであらせられる。

これは近いうちにお家に招待しないとあとあと面倒くさいことになりそうだ。